

## 上海のユダヤ人難民社会における女性の地位

阿部, 吉雄  
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門・国際共生学

<https://doi.org/10.15017/6796471>

---

出版情報：言語科学. 42, pp.39-47, 2007-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会  
バージョン：  
権利関係：



# 上海のユダヤ人難民社会における女性の地位

阿 部 吉 雄

## 「バーの女性」論争

ナチスドイツ支配下のヨーロッパから中国の上海租界に逃れたユダヤ人難民<sup>1)</sup>が発行していた新聞「Die Tribuene」の1940年第6号(3月第2週)の巻頭に「移住者の誇りを持て」という記事が掲載された。<sup>2)</sup> 約2ページの記事の中で筆者のH. Petzallは、上海での貧しい難民生活において男性よりも女性の方が容易に仕事を見つけているが、「それは女性が多才であり、男性に向かない細かい手仕事ができることによる。女性たちはとても迅速に順応し、(かつてヨーロッパにいた時のように)女中に命令する代わりに、今日では自らともに仕事に手を染め、夫たちに対して事実上の指揮官になっている」と述べ、ヨーロッパにおけるユダヤ人社会の伝統であった家父長制男女関係が移住によって崩れ始めていることを指摘している。上海で女性が男性よりも職を得ることが容易であったと証明することはできないが<sup>3)</sup>、男性が大きな喪失感を抱いていたことは事実のようである。彼らの多くはヨーロッパにおいて中産階級以上の地位にあり、すでに中年以上の年齢だったため、誰もが上海で再びゼロから始める気力があつたわけではなく、経済環境が異なる上海ではヨーロッパで習得した職業につくチャンスも少なかった。

Petzallは女性の生命力の強さを高く評価するが、一方で女性がバーで働くことについては断固反対する。彼は酔っ払いから金を搾り取ることが不道德であるだけでなく、そのような職業によって貧しい生活から逃れようとする、特にハイムと呼ばれる難民収容施設<sup>4)</sup>から出るために娘をバーで働かせることは恥ずべき行為であると主張する。そして上海では一度バーで働いた女性はもはやまともな職業につくことはできないとも述べる。ハイムにおいて難民たちは学校の教室や講堂程度の大きさの部屋に並べられた2段ベッドに寝かされ、プライバシーは皆無だった。ハイムに住まなくても無料の給食は受けられたため、難民たちの第1の願いはどんなに貧弱な部屋であろうと借りて、ハイムを出ることだった。

多くの難民たちが居住した上海北部の虹口・揚樹浦地区、特にBroadway Road(百老匯路、現在の大名路)は揚子江支流の黄浦江を上って来た外国船が接岸する棧橋に近く、外国人水夫相手の商売をするユダヤ人難民のバーが軒を並べていた。西川光は『12月8日の上海』の中で「揚樹浦のユダヤ人」という文章を書いているが、そこで太平洋戦争前にユダヤ人難民たちが営んでいたキャバレーの様子を描いている。<sup>5)</sup> 上海を流れる黄浦江沿いの一角に5, 6軒のキャバレーが軒を並べている。20畳くらいの広さの店内は中央に舞踏場があり、客の相手をする若いユダヤ人女性が4, 5人いて、入り口近くの隅で3人の楽師がピアノとバイオリンとチェロの3重奏を聞かせている。ユダヤ人女性たちは皆きれいだが、中にはそろそろ太り始める年齢の者もいると西川は伝える。5, 6軒のキャバレーにそれぞれ数人の女性がいたとすれば、それだけで20~30人

になる。黄浦江沿いの通りのバーは専ら外国人水夫を相手に商売をしていたのだろうが、ユダヤ人・日本人・中国人相手のバーもあり、水商売で働く女性の数は3桁に達していたと推測される。

<sup>6)</sup> そしてこれらのバーでは売春が行われることも珍しくなかった。<sup>7)</sup>

女性の地位に関する「Die Tribuene」の関心は高く、1940年第2号(2月第3週)に「中国における人身売買」<sup>8)</sup>、1940年第6号(3月第2週)に「日本における女性の地位」<sup>9)</sup>というRobert Basilの記事を掲載している。前者では中国の田舎において女性(妻)が息子を産むための道具として売買され、上海においては経済的搾取の手段として子ども(大抵は女兒)が売買され、売春を強要されることを紹介している。朝日新聞の記事や「帝国農業協会」の統計を用いた後者では、日本の若い娘は家族の生活のためだけでなく男の兄弟の勉学や職業教育のためにも芸者・売春婦・女給・女中・女工になることを強いられるが、彼女たちは小さい時から男性よりも価値が低い者として教育されているので、自分の運命をそれほどつらいとは思っていないと伝えている。

このように「Die Tribuene」は社会的に虐げられる立場にある女性への同情と、そのような社会的状況への批判を前面に打ち出している。先のPetzallの記事もバーで働く女性への批判ではなく、経済的困難から逃れるために娘や妻をバーで働かせることを戒める内容である。しかしPetzallの記事の後に置かれたBasilの「虹口アフォリズム」にはバーで働く女性とその夫についてかなり風刺が効いた表現が並んでいる。「妻が夫を改善する方法はひとつ。自分がどうやって金を稼いでいるか、彼に正直に言えばよい」、「多くの女性たちは貞節を守る時間がない。彼女たちはいつも最後に紹介された者が好きなのだ」、「不貞な妻は家庭で夫を楽しませ、「仕事」で自身楽しむ」、「今時、夫たちはみな独り者のように生き、独り者たちはみな子どものように生きる。ただ裕福な者たちだけが夫のように生きる」、「夫の収入は、彼の妻と結婚しなかった男たちにかかっている」、「結婚していると打ち明けるバーの女を決して信頼してはいけない。そんなことを告げる女性はすべてを告げかねない」、「男性が愛する場合、女性に与えるものは多かったり少なかったりする。しかし恋する女性はすべてを犠牲にする、夫の評判さえも」、「「バーで働く妻」を信頼する夫たちからすぐに分かるのは、みな不自由していないように見えること」<sup>10)</sup>、「以前は恋人が過去、夫が未来だった。今はその逆」、「妻について考えることをすべて彼女に言っても、彼女を変えることはできない。彼女は自分の客によって作られたままであり続ける」、「移住者が自分の性格に合った女性と結婚しなければならないとすると、独り者でいるしかない」、「道徳を説く女性はバーで働くには醜すぎる」、「女性の人生は収入カーブに沿って展開し、男性は失業という直線を進む」、「妻はしばしば幸福だが、いつも善良というわけではない。夫はしばしば善良だが、いつも幸福というわけではない」、「我々男性は今、女性が「愛情」から何をするかを知っている」、「虹口で最も歓迎されるのは、共同租界の男たちの恋愛欲求」。<sup>11)</sup>

「移住者の誇りを持て」と「虹口アフォリズム」はユダヤ人難民社会にセンセーションを巻き起こし、反発も起こった。ハイムに住むことは誰にとっても忌まわしいことゆえ、女性がバーで働く以外に家族の収入を増やす現実的な案がない限り、このテーマに触れるべきではないというものである。さらにはハイムに住むことはバーで働くこと以上にモラルを低下させる、ドイツを去って上海へ来たのはハイムでの悲惨な生活を送るためではないという意見もあった。(彼らは数

年後にホロコーストが起こることを知らない。)このような反応から、経済苦から女性がバーで働き、時には売春もすることが、ごく一部の例外的事例ではなく社会現象化していたことが分かる。これらの意見に対し、Petzallは「Die Tribuene」の1940年第7号(3月第3週)において「我々はこのことに触れてもよかったか」という記事を書き、女性たちの犠牲的精神を認めながらも、大切なことは収入の多さではなくどのような種類の仕事をするかであるという主張を繰り返した。また以前ロシア人難民<sup>12)</sup>の女性たちが水商売の仕事や売春を行うことへの批判が起きた時、自分の反対論者たちはロシア人女性(やその家族)を弁護しなかった、また救援委員会の支援を受けている自分たちユダヤ人難民は何の支援もないロシア人難民より恵まれていると反論した。<sup>13)</sup>

もう1人の当事者Basilもやはり「Die Tribuene」の1940年第7号(3月第3週)において「タブー」という記事で、生活には常に規律が必要であり、タブーによって生活を品位あるものに形作ることができると説く。<sup>14)</sup>進歩とタブーは矛盾せず、新たな状況に対応するタブーが古いタブーに取って代わるだけである。上海での自分たちの生活に古いタブーは適合しないが、「やりたいことをやれ」という移行期が過ぎれば、新たなタブーが作られるだろうと。Basilのこの記事もバーで働く女性と娘や妻をバーで働かせる親や夫への批判を引っ込めたとは言えまい。

PetzallとBasilへの具体的な反論として「Die Tribuene」の1940年第8号(3月第4週)に掲載されたAlfred Dreifussによる「バーの女性。Tribuene編集者への公開書簡」が確認できる。

<sup>15)</sup> Dreifussはドイツ共産党に所属し、非合法の活動のため何年間も強制収容所に入れられた後上海へ移住した人物である。上海で彼は1939年春に設立されたユダヤ人難民芸術家の団体「芸術家クラブ(Artist Club)」(1940年1月「ヨーロッパ系ユダヤ人芸術家協会(European Jewish Artist Society, EJAS)」に改称)の責任者として、演劇の演出や音楽会の企画を行い、上海大学で音楽史の講義も行った。<sup>16)</sup>この公開書簡においてDreifussはまずPetzallが行った「女性がバーで働き、酔っ払いから金を搾り取ることは不道德である」という主張の正当性を吟味する。若いユダヤ人女性がわずかな金しか持たず上海に到着した時、バーは彼女たちが働ける数少ないチャンスの1つだった。またヨーロッパと違い上海では単に飲み物を飲んだり、友人と晩にアルコールを飲んだりするにも、レストランではなくバーへ行く。そしてバーで若い女性が飲み物を出すのは歴史的習慣である。アルコールを売ることと靴を売ることには違いはない。さらに1晩で給料を散財してしまう水夫の「酔っ払い」以外に普通の客もいるとして、Petzallの道德論を相対化する。次にDreifussはPetzallの「バーで働く(娘をバーで働かせる)くらいなら、ハイムに住む方がましだ」という意見に対して、自分であればバーで働く方を選ぶと言う。それによってハイムを出ることができるだけでなく、バーで稼いだ金で何かを始めることが可能になる。ドイツにいる母親を呼び寄せた女性もいると、収入を得ることの利点を挙げる。「バーで働いた女性は他の勤め口を得られない」という意見については、他の仕事を得ることがそもそも難しいと反論する。最後に売春をするようになる危険性について、Dreifussは人それぞれであり、多くの女性は「多くの道德家がお手本にできるような繊細な感情と内なる清らかさで」身を処しており、バーで働いていても正しい意思を持つ者は心配ないと結論づけている。<sup>17)</sup>

PetzallやBasilの批判は上海における就業の難しさとハイムの陰鬱な(特にプライバシーのない)生活を無視し、ヨーロッパから持って来た古い価値観にしがみついている。他方Dreifussに

よる擁護も女性の搾取という問題点から目をそむけ、根拠のない楽観論に逃げ込んでいる。問題の根源はユダヤ人たちがナチスの迫害による難民であると同時に、移住者でもあるという点に求められよう。難民としては生存に対する危険を逃れ、安全が得られればそれでよい。しかし移住者として彼らは新天地において新しい生活を築かなければならない。過去に受けた迫害のトラウマから自由になるには将来への見通しを必要とするのである。ユダヤ人たちの多くが故郷では中産階級以上であり、しっかりした生活基盤を持っていたことから、それは自然な欲求であったろう。そして上海という土地には大きく分けて2種類の人々がいた、すなわち植民地支配者としての外国人と、一部の例外を別にすれば明日をも知れぬ生活をしている中国人の貧民・難民である。<sup>18)</sup> ユダヤ人たちは外国人ではあるが、個人的資産も国という後ろ盾もない。また難民であるが、慣れない気候の中で中国人のような土着の生命力もない。<sup>19)</sup> 「バーの女性」問題は、西欧ユダヤ人というアイデンティティと中国という新たな環境とのギャップを乗り越える方策を見つけれない難民社会が抱える矛盾の顕在化だった。

### 『未知の大地』

「バーの女性」論争から1年後の1941年4月8日、このテーマを扱った演劇『未知の大地 (Fremde Erde)』が上海ユダヤ人学校で上演された。<sup>20)</sup> ユダヤ人難民の劇作家 Hans Schubert (ペンネーム Hans Wiener, 1905-1965) とジャーナリスト Mark Siegelberg (1895-1986) が共作した4幕からなる戯曲は上海に移住したユダヤ人夫婦を描いている。ウィーン出身の有能な医師である夫は開業資金がないため、石鹸や鉛筆の行商でわずかな収入を得ている。夫婦にとって唯一の財産である真珠のネックレスを夫の病気のため内緒で売ってしまった妻は生活のためバーで働いているが、夫はそれを我慢できない。ある日、ネックレスを売る代金をあてにして、夫が設備の充実した診察室を購入する契約を結ぶ。窮した妻は夫への愛情から、バーで知り合った中国人の富豪に身をゆだねて金を工面する。診察室を得た夫は開業医として成功するが、妻と中国人の一件を知り、自分への裏切りとを感じる。妻はすでにネックレスを手放していたことを明かさず、自分の愛を信じない夫に絶望し家を出る。ネックレスのことを知り、自分に開業させるために妻が中国人の富豪に身をゆだねたことに気付いた夫は、診察室を売ってその代金を富豪に返し、妻の行方を捜す。コレラ、天然痘、チフスなどの伝染病が蔓延する中国内陸部への医療隊に看護師として参加することにした妻は夫を許すが、命の危険を伴う決心を変えない。夫は自らも医師としてこの医療隊に参加することを決断する。

『未知の大地』の初演について、アメリカでユダヤ人難民により発行されていた新聞『Aufbau』の1941年6月27日号(第26号)に上海の編集者 Ernst Pollak が、2度の公演(4月8日と10日)はチケット完売であり、「この戯曲の意図は上演後数週間に渡って移住者の間で話題になっている。ユダヤ人移住者以外にも反響は大きく、『未知の大地』はすでに英語とロシア語への翻訳が始まっている」と報告している。<sup>21)</sup> このセンセーショナルなテーマを扱った戯曲が上演以来『Aufbau』の記事の時点までユダヤ人難民社会において話題になり続けているという事実から、「バーの女性」論争が依然決着しておらず、この社会的問題も解消していないことが分かる。<sup>22)</sup>

『未知の大地』の原稿を編集出版した Michael Philipp は「ある意味で逆説的なのは、非正常

状態の社会的状況から生じるテーマが市民社会的な枠—劇場—の中で示されたことである。特にその内容について言えば、普段であればタブーとされ、それを拒絶することが市民的道徳の基本的合意に属するような「反道徳的」出来事が公然と描かれていたのであるから。事態を尖鋭化させる契機としてさらに、これは時間的に離れた歴史的な事態ではなく、観客が自分の現在の生活状況において具体的に一確かにしばしばとても痛ましく一対処しなければならない差し迫った問題だった。ここで『未知の大地』の話は、少なくともその実現性があると思われるに違いない、またはアピールとしての有効性は存在する解決の可能性を示してくれた。一方では所与の状況に完全に自らを委ねてしまうことに対し、他方では精神的な自己保存のため伝統的な道徳観念に非現実的にしがみつくことに対して中心的な価値として夫婦の強力関係が、世の中の不運に対して個人的な連帯が対置された」と評している。<sup>23)</sup> Philipp が言う通り、夫が妻を養うというヨーロッパにおけるユダヤ人の家父長的伝統を捨て、夫婦が対等のパートナーとして協力し合いながら上海での生活基盤を築くように社会や家族の形態を変化させることがユダヤ人難民にとって喫緊の課題であった。そしてそこでは夫婦の愛情が一層重要になる。『未知の大地』の最後の場面で夫は妻に言う。「この未知の大地で私たちは相変わらず無力さをさらけ出している。移住してしっかり根を下ろすことは容易じゃない。そして私たちが互いに支え合わなければ、最初の台風で滅ぼされてしまうだろう。」<sup>24)</sup>

しかし『未知の大地』が開いた地平はそれだけではない。先述したように難民として生き延びるためには経済的な生活基盤を築くことで十分だが、移住者として新天地で生きていくためには新たな目標が必要である。診察室を得て開業医として成功した後も、夫は人生の意義を見出せずにいた。「年寄りには少なくとも人生を終わったものと考えることができる。しかし私の世代はどうすればよいのか？人生を終わらせるには私たちはまだ若すぎる…そして人生を最初からやり直すにはすでに年を取りすぎている。」<sup>25)</sup> 上海のユダヤ人難民は中年以上の年配者が多く、『未知の大地』の主人公の男女ももう若者とは言えない世代に属する。<sup>26)</sup> 自らの存在の前提を形成していた社会から放逐された難民たちは、半生をかけて築き上げてきた財産を失っただけでなく、社会的存在としての人間が持つ根源的価値をも奪われたのである。『Aufbau』の記事で Pollak は次のようにも言っている。「この作品は上海が舞台であるが、すべての移住者の生活のひとこまをももたらす。追放された人間たちが異国において未知の大地において進むべき道を見つけようとする。この作品は、異常な状況下でのこの生活がこれらの人間たちの本質、生活そして自我全体を試す様を示す。」『未知の大地』の結末の意味は、対等なパートナーとしての夫婦の関係を確立するだけでなく、彼らが移住先である中国のために働くことに人生の意義を見出すことにある。そしてこの決断においても妻が主導的役割を果たすということが上海のユダヤ人難民社会における女性の役割の大きさを物語っている。

### 「婦人連盟」

中国のために働くという『未知の大地』の結末が一般のユダヤ人難民の生活においてどの程度実践可能であったかを評価することは難しい。しかし自らが属する共同体の役に立つということはすぐにもでき、この方面でも女性が男性に手本を示した。1940年 Gertrud Wolff を主宰者とし

てユダヤ人難民社会に「婦人連盟 (Frauenbund)」が結成される。その会員数は最高 1000 人以上に達し、病人や身寄りのない高齢者を訪問したり、貧困者に薬および安息日や祝日の食事を提供したりするなど社会的弱者のために献身的な奉仕を行った。特に 1941 年の過ぎ越しの祭りではセーダ (セデル, Seder) とよばれる夕食に 2 晩で 220 人の高齢者や貧困者を招待し、1942/43 年の冬は暖房室を設け多くの凍える人々に暖と一杯のお茶を提供した。<sup>27)</sup> その活動はユダヤ人難民の大部分が上海を去りコミュニティが消滅した 1949 年まで続いた。<sup>28)</sup>

## 注

- 1) 上海租界への移住には入国ビザが必要でなかったため、アメリカ・イギリス・フランスその他の希望する移住先のビザが得られない約 1 万 8000 人のユダヤ人が 1938 年末から 1941 年末の間に上海へ移住した。ドイツ政府はわずか 10 ライヒスマルクの持ち出ししか認めなかったため、ユダヤ人難民たちは携帯品を除けば事実上無一文で上海にたどり着いた。
- 2) „Seid stolz Emigranten zu sein“. S. 161 ff. ユダヤ人難民の中にはジャーナリストが多く含まれ、約 30 の月刊・週刊・日刊紙が発行された。
- 3) ユダヤ人難民が多く居住した上海北東部の虹口・揚樹浦地区を管轄する提籃橋分局特高股が 1944 年 8 月 24 日付けで作成した『外人名簿』には 1 万 2309 人のユダヤ人難民およびその非ユダヤ人家族が含まれている。男性 7301 人、女性 5007 人 (性別不明 1 人) のうち、職についていない者は子どもを除いて男性 2103 人、女性 3495 人であり、女性の失業率は男性の 2 倍以上になる。しかし女性が行っていた賃金の非常に低い雑用のような仕事 (例えばハイムでの食材の水洗い) は職業とみなされていなかった可能性がある。拙稿「資料調査：上海虹口地区『外人名簿』(1944 年 8 月)に見られるユダヤ人難民」、『言語文化論究』(21) 2005 年、九州大学大学院言語文化研究院、161 頁。
- 4) 上海在住の裕福なイラク系ユダヤ人とアメリカのユダヤ人組織 Joint を中心に組織された難民救援委員会は 6 箇所前後の難民収容施設を設置し (時期によって増減や移動があった)、難民のうち最も貧しい約 2500 人を収容した。
- 5) 西川光：『12 月 8 日の上海』、泰光堂、1943 年 (復刻版、大空社、上海叢書第 12 巻、2002 年)、207～219 頁。
- 6) 上述の『外人名簿』に記載されたユダヤ人女性のうち、1944 年 8 月時点で 21～25 歳の者が 281 人、26～30 歳が 246 人、31～35 歳が 499 人、36～40 歳が 587 人であり、水商売で働く女性の数が 3 桁とすると、その比率はかなり高いと言えよう。『外人名簿』で職業を「Servicegirl」、「Servicelady」、「Servicewoman」、「Servicemaid」と申告している 19 歳から 53 歳の 18 人の平均年齢は 29.9 歳である。
- 7) 自宅で客を取る女性もいた。Sigmund Tobias: „Strange Haven. A Jewish Childhood in Wartime Shanghai“. Urbana and Chicago (University of Illinois Press) 1999, S. 58 f. このメモワールで紹介された女性の場合は「Die Tribuene」の記事のように両親がいて、彼

女の売春により家族は他のユダヤ人難民よりも物質的に恵まれた生活をしている。

- 8) „Menschenhandel in China“. S. 5 ff.
- 9) „Die Stellung der Frau in Japan“. S. 174 ff.
- 10) 「よく世話をされている」という意味の *versorgt* には「心配でやつれている」という意味もあり、両方をかけて「妻の収入のおかげでいい生活をしているが、同時に妻が他の男と浮気することを心配している」ということか。
- 11) ユダヤ人難民の多くが居住していた虹口・揚樹浦地区も行政的には共同租界に含まれるが、日本軍が警備していた虹口・揚樹浦など蘇州河北側に対して、ここではアメリカ・イギリスが管理していた蘇州河南側を指している。裕福な外国人は共同租界の中の蘇州河南側や、さらに南のフランス租界に住んでいた。
- 12) 上海には 1917 年のロシア革命を逃れた白系ロシア人 1 万 1000 人、および革命に伴って発生したボグロム（反ユダヤ人暴動）や 1932 年の満州事変で北中国へ進出した日本軍による迫害を逃れたロシア系ユダヤ人 4000 人がいた。
- 13) „Durften wir das sagen?“. S. 201 f.
- 14) „TABU“. S. 205 ff.
- 15) „Barfrauen. Offener Brief an den Herausgeber der ‚Tribüne‘“. S. 241 ff.
- 16) 拙稿「上海のユダヤ人難民音楽家」、『言語文化論究』（22）2006 年、九州大学大学院言語文化研究院、1～12 頁。
- 17) ユダヤ人難民の女性芸術家に対しても道徳的に不当な要求が行われることがあるが、彼女たちはそのような仕事を断る強い意志があると Dreifuss は紹介している。
- 18) 1937 年 8 月の第 2 次上海事変により、上海にはユダヤ人難民より先に 70 万人の中国人難民が流入していた。
- 19) 谷川徹三は 1940 年 5 月の『改造』に書いた「周佛海氏など」という文章の中で上海のユダヤ人難民と中国人難民を比較している。ユダヤ人難民自身は貧しいが「診療室などは清潔であるし、そこにはレントゲン室もある。眼科や歯科や耳鼻咽喉科の診療室もやがて出来上らうとしてゐた。産室はニューヨークの某夫人の寄附になるもので、これも立派に整つてゐた。」他方中国人難民区は「ひどいものであつた。しかし小屋の汚なさよりも、そこにゐる人達の皮膚や衣服の汚さが一層私の注意をひいた。それに皆が皆と言つてもよい程ただれ眼である。日本の貧民窟も私は知つてゐるが皮膚や衣服のかういふ汚なさはない。もう一つ注意をひいたのは、さういふ小屋にゐる人達が案外呑気な顔をしてゐることである。子供達はニコニコしてゐる。（中略）それにしても如何にも屈託のない顔をしてゐる。これに反してユダヤ人収容所では、みんな暗い顔をしてゐる。悲痛なという表情にも多く出合った。」石濱知行、豊島與志雄、加藤武雄、谷川徹三、室伏高信、三木清：『上海』、三省堂、1941 年（復刻版、大空社、上海叢書第 9 巻、2002 年）、248～250 頁。
- 20) 上海ユダヤ人学校（Shanghai Jewish School）は、アヘン戦争（1940-1942）後の南京条約（1942）で上海が開港されて以来ここに在住するイラクのバグダッド出身のユダヤ人（セファルディ系ユダヤ人）社会が 1902 年貧しい家庭の子弟のためにシナゴグに付属して



設立したヘブライ語学校から発展した。上海の外国人社会の根無し草的世界市民主義からユダヤ人社会を守るために伝統的なユダヤ教育を施したが、世俗的科目も教えられ、授業は英語で行われた。上海ユダヤ人学校には 20 世紀に入って上海へ移住して来たロシア系ユダヤ人の子弟も通った。1931 年には Seymour Road（西摩路、現在の陝西北路）の Ohel Rachel シナゴグに隣接する広大な土地に 8 つの教室と図書室を備える 2 階建ての新しい校舎を得た。1939 年には中部ヨーロッパからのユダヤ人難民の子弟 120 人も通った。拙論「上海のユダヤ人難民子弟への学校教育」、『言語文化論究』（21）2005 年、九州大学大学院言語文化研究院、33～34 頁。

学校で上演されたという事実はこの演劇の水準の高さを疑わせるものではない。演出を担当した Karl Bodan を始めとして、Fritz Melchior, Ursula Perlhoeft, Herbert Zernik, Marion Lissner, Jenny Rausnitz ら上海のユダヤ人難民社会を代表する俳優・女優が出演した。当時上海には西欧的な劇場は存在せず、ユダヤ人難民芸術家たちは音楽家を含め、映画館、学校や（以前学校だった）ハイムの講堂で上演した。拙論「上海のユダヤ人音楽家」、『言語文化論究』（22）2006 年、九州大学大学院言語文化研究院、1～12 頁。

- 2 1) „Fremde Erde‘. Uraufführung in Shanghai“. S. 13.
- 2 2) 1941 年 12 月に太平洋戦争が始まった後は上海が戦時体制になり、主に外国人水夫を相手にするバーの営業にも陰りが出たであろう。1942 年 6 月のミッドウエー海戦での敗北、1943 年 2 月のガダルカナル島撤退などにより太平洋戦争の長期化は避けられない情勢になると、上海でも食料の配給制や自警団を組織する保甲制度が導入され、1943 年 5 月以降ユダヤ人難民は虹口・楊樹浦地区内の黄浦江から離れた約 2 km<sup>2</sup>の指定地域（俗に言う上海ユダヤ人ゲットー）に居住と就業を制限される。拙論「上海のユダヤ人ゲットー設置に関する考察」、『言語文化論究』（15）2002 年、九州大学大学院言語文化研究院、51～52 頁。この状況の変化が以前のようなバーの隆盛をもたらしたとは考えられないが、難民の経済状態の一層の悪化により売春が増えた可能性はある。
- 2 3) Hans Schubert, Mark Siegelberg : „Die Masken fallen‘ — ‚Fremde Erde‘. Zwei Dramen aus der Emigration nach Shanghai 1939 - 1947“. Hrsg. v. M. Philipp u. W. Seywald, Hamburg 1996, S. 28.
- 2 4) Hans Schubert, Mark Siegelberg : „Die Masken fallen‘ — ‚Fremde Erde‘. Zwei Dramen aus der Emigration nach Shanghai 1939 - 1947“. S. 137.
- 2 5) Hans Schubert, Mark Siegelberg : „Die Masken fallen‘ — ‚Fremde Erde‘. Zwei Dramen aus der Emigration nach Shanghai 1939 - 1947“. S. 114.
- 2 6) 『外人名簿』に記載された 1 万 2309 人の年齢分布を挙げると、0～9 歳 355 人、10～19 歳 818 人、20～29 歳 1320 人、30～39 歳 2507 人、40～49 歳 3170 人、50～59 歳 2672 人、60～69 歳 1197 人、70～79 歳 229 人、80～89 歳 18 人、年齢不明 23 人。拙稿「資料調査：上海虹口地区『外人名簿』（1944 年 8 月）に見られるユダヤ人難民」、154 頁。
- 2 7) 『Jüdisches Nachrichtenblatt』1944 年 8 月 11 日 Nr. 27, S. 7.
- 2 8) David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of

Shanghai, 1938-1945". Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (1976), S. 424 f.

本稿は平成 18 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「第 2 次世界大戦時，中国上海に存在したユダヤ人難民社会の実態研究」(研究代表者：阿部吉雄)による研究成果の一部をまとめたものである。